

熊谷亮丸著「パッシング・チャイナ 日本と南アジアが直接つながる時代」講談社 2013年3月4日刊を読む

## 日本人が持つ4つの強み(II)

### 4. 日本人の強み④…柔軟性に富み多様な社会

— 第四に、日本人は柔軟性に富んでおり、わが国は極めて多様な社会を有する。—

(1)①日本人は、ユダヤ教やキリスト教のような「唯一絶対神」を崇めることなく、「八百万やおよろずの神」を信奉してきた。

②また、天皇制はわが国の権威の象徴として、2000年以上にわたり継続している。蘇我氏や藤原氏、さらには織田信長といった圧倒的な権力者ですら、天皇制を廃止することはできなかった。いわゆる「権威と権力の二重構造」である。

③自然に対する捉え方も、西欧諸国と日本とは大きく異なっている。西欧諸国では、プラトンの時代から、自然は科学の進歩によって征服・支配すべき対象でしかない。これに対して、わが国では、自然を畏怖いふし、自然を「神」として崇めて、その前にひざまづくような思想が根づいている。

④筆者は、ステレオタイプの「日本は模倣の文化である」との批判は的外れであると考えている。

⑤わが国は、海外の文化などを柔軟に吸収したうえで融合する——言葉を換えれば、換骨奪胎してまったく新しいものを作り上げてきたのである。「漢字」から「かな」を発明したように、外国文化のエッセンスを抽出し、それを再構成して新たなものを作り上げるのだ。

(2)①この主題から少し外れるが、一つ指摘しておきたいことがある。それは日本人が海外の叡智えいちなどを庶民のレベルにまでさりげなく定着させていることである。

②たとえば、『南齊書』の王敬則おひけいそく伝に基づく「三十六計逃げるにしかず」、あるいは釈迦と隣国・コーサラ国とのやり取りに由来する「仏の顔も三度」などだ。これらが普及したのは、江戸時代に寺子屋を通じて、庶民が読み・書き・そろばんを学び、知的レベルが高かったこととも関係する。こうした知的水準の高さが、明治維新以後、急速に欧米諸国に追いつくのに役立った。もちろん、知的・精神的に鍛えられた武士階級が指導者層となった利点はいうまでもない。

③日本は台湾や朝鮮(現在の韓国・北朝鮮)の領有時にも教育を徹底させていた。それが、その後の両国の急速な近代化の一助になったことは否定できないだろう。

(3)①実際、日本人は外国の文化を取り入れて加工する名人だ。本来、キリスト教の行事であった「クリスマス」や「バレンタインデー」も、日本独自のイベントとして普及させてしまった。中国にルーツを持つ「拉麺」や「餃子」も、わが国でまったく新しい食べ物

として発展を遂げている。たとえば、熊本市に本店を置く「味千ラーメン」というチェーン店は、中国に出店し大変な人気だ。

- ②産業界でも、日本企業は継続的な取引関係のなかで、ノウハウの蓄積や人材開発を推進してきた。チームワークのよさが労働生産性向上に寄与したのである。
- ③易姓革命で王朝が交代してきた中国や、西洋の文化と異なり、日本は革命的・非連続的な断絶、すなわち新しいものが古いものに全面的に取って変わることが起こりにくい社会である。つまり、日本の社会は様々な文化を受容し、変容するが、非連続的な断絶は起きない、非常に柔軟な構造を持っているのだ。
- ④たとえば、幕末の時代には、当初、天皇を崇拜して欧米諸国を討伐する「尊王攘夷派」が勢いを得た。しかし、長州藩の四国連合艦隊(英・仏・米・蘭)との戦いや、薩摩藩の英国艦隊との戦い、さらには、高杉晋作の上海視察、伊藤博文・井上馨の英国留学などを通じて、現実的に欧米諸国との間に圧倒的な国力の差があることを認識すると、多くの武士たちが「大政奉還」で矛を取めず、「王政復古」による新政府樹立へと転換した。
- ⑤われわれは、こうした日本人の強みを的確に認識したうえで、国際社会のなかで誇りを持って行動していく必要があるだろう。

## 5. **日本の普遍的な価値を世界に**

—「よくぞ日本に生まれけり」日本は本当に素晴らしい国だ。—

- (1)①英国の歴史家・トインビーの分類によれば、世界は七つの文明圏に分けられる。「西欧キリスト教文明」「ロシア正教文明」「イスラム文明」「ヒンズー文明」「シナ(中華)文明」「ラテンアメリカ文明」、そして、われらが「日本文明」である。
- ②つまり、日本は一国で一つの文明圏を形成する、世界でも類を見ない国なのである。2012年に尖閣諸島を巡り中国とトラブルが起きたことは、残念な出来事であった。
- ③しかし、「人のフリ見て、わがフリ直せ」である。われわれは、「悩ましい隣人」のおかげで、もう一度日本の素晴らしさと同時に、これから解決すべき課題を再認識することができた。
- (2)①中国は日本にコンプレックスを持っているのではないだろうか。われわれは、彼らがより一層うらやむような素晴らしい国を作る必要がある。日本のマスコミは自虐的なので「日本は本当にダメだ」という議論が溢れ返っている。しかしながら、隣の国と異なり、国民が問題点を発見・共有している時点で、わが国の問題はすでに半分以上解決しているのである。
- ②日本人は国際社会における自らの存在感に自信を持つべきだ。2012年5月に英国のBBC放送が読売新聞社などと22か国で共同実施した世論調査によれば、「世界によい影響を与えている国」の第一位は日本である。日本が「世界によい影響を与えている」という評価は58%でトップ、「悪い影響を与えている」はわずか21%だった。トップの日本に続いて、2位はドイツ(56%)、3位はカナダ(53%)、4位は英国(51%)の順番となっている。
- ③われわれは、等身大の中国を見失い、日本を過小評価してこなかっただろうか。今後、

中国はバブルが崩壊し、政治的・経済的に大きな苦境に陥るだろう。これに対して、社会の安定性が強い日本は繁栄を続けると見られる。

(3)①日本の未来は間違いなく明るい。

②われわれは、中国とのトラブルをきっかけに、自らの長所と短所を<sup>きよしんたんかい</sup>虚心坦懐に見つめ直すことができた。そして、わが国の根幹にある、自由と民主主義の<sup>すうこう</sup>崇高な理念は、残念ながら中国には到底真似のできないものである。

③わが国には言論の自由があり、基本的人権が保障されている。また、日本人は間違っことは素直に謝る正直な心を持っている。世界に冠たる民主主義国家、法治国家、平和国家である日本に生まれたことに、われわれ日本人は大きな誇りを持つべきなのである。そして、いまこそこうした普遍的な価値を世界中に発信していこうではないか。

P236 ~ 240

#### <コメント>

日本で一番元気なエコノミスト、熊谷亮丸氏の「日本人の強み」の分析は素晴らしい。みがいて更に強くするのが我々の使命と考える。

— 2021年7月2日林明夫—